

翻刻『松ヶ丘山崎家略譜稿本』⑮

川略年表、跋Ⅱ

〔※文中の■は読めなかった文字です。〕

第十 略年表

(皇紀) (年号) (先生年齢) (月) (日) (記事)

二三五四 元禄七 甲戌 掛川城ハ寛文七年未十一月井伊兵

部少輔直之賜リ三代在城四十四

年

二三五五 八 乙亥 二 八 江戸大火アリ

二三五六 九 丙子 一一 一〇 明正天皇崩御聖寿七四

二三五七 一〇 丁丑 一〇 一七 江戸大火アリ

二三五八 一一 戊寅 九 六 江戸大火アリ

二三五九 一二 己卯 四 歴朝山陵ノ修営成ル

二三六〇 一三 庚辰

二三六一 一四 辛巳 三 一四 浅野長矩殿中ノ刃傷

二三六二 一五 壬午 一二 一四 浅野ノ遺臣主ノ仇ヲ報ス

二三六三 一六 癸未 二 四 大石良雄以下切腹

二三六四 宝永元 甲申 三 一三 宝永ト改元

二三六五 二 乙酉

二三六六 三 丙戌 三代目井伊兵部少輔直朝卒シ同年

信州飯山城主松平遠江守忠喬移

リ掛川城ニ住ム

二三六七 四 丁亥 一〇 四 各地大地震遠州荒井関没ス

二三六八 五 戊子

二三六九 六 己丑 正 一〇 五代將軍綱吉薨ス(六四)

二二七〇 七 庚寅 一二 一七 東山天皇崩御聖寿三五

二三七一 正徳元 辛卯 四 二五

正徳ト改元。五月松平遠江守忠喬

摂州尼ヶ崎ニ移封。同月小笠原佐

渡守長寛武州岩槻ヨリ移リ領ス

二二七二	二	壬辰	一〇	一四	六代將軍家宣薨ス（五一） 此年第二世萬右衛門生ル
二三七三	三	癸巳			
二三七四	四	甲午			
二三七五	五	乙未			
二三七六	享保元	丙申	正	一一	江戸大火アリ。四月晦日七代將軍 家継薨ス（八）
			六	二二	享保ト改元
二三七七	二	丁酉	二	三	大岡忠相江戸町奉行トナル
二三七八	三	戊戌			
二三七九	四	己亥			
二三八〇	五	庚子			
二三八一	六	辛丑			
二三八二	七	壬寅			
二三八三	八	癸卯			
二三八四	九	甲辰			
二三八五	一〇	乙巳			
二三八六	一一	丙午			
二三八七	一二	丁未	一二	一〇	江戸大火アリ
二三八八	一三	戊申			
二三八九	一四	己酉			
二三九〇	一五	庚戌			
二三九一	一六	辛亥	四	一五	江戸大火アリ
二三九二	一七	壬子	八	六	靈元天皇崩御聖寿七九。此年大飢 饉、餓死三十万人ニ及ブ
二三九三	一八	癸丑			
二三九四	一九	甲寅			青木文蔵島津家に交渉、甘藷種三 俵ヲ取寄セ小石川薬園ニ植エシ メ其種ヲ伊豆諸島及関東ニ頒布 ス

二四一九	九	己卯	五	六	第二世萬右衛門妻歿
二四二〇	一〇	庚辰	六	一二	九代將軍家重薨ス、五一
二四二一	一一	辛巳	七	一二	桃園天皇崩御、聖寿二二
二四二二	一二	壬午	一二	一〇	太田撰津守資俊卒ス（四四）、子資
二四二三	一三	癸未	一二	一〇	愛嗣ク
二四二四	明和元	甲申	六	二	明和ト改元
二四二五	二	乙酉			早春薩摩ノ御用船豊徳丸、御前崎
二四二六	三	丙戌			沖ニテ難破、同村ニツ谷大沢権右
					衛門父子ニ救助セラレ、謝礼代リ
					ニ甘藷三個ヲ貰受ケ之ヨリ同地
					ニ甘藷弘マル
二四二七	四	丁亥			
二四二八	五	戊子	七	二〇	第二世萬右衛門没ス、五八
二四二九	六	己丑			
二四三〇	七	庚寅			
二四三一	八	辛卯	九	一	第二世後室歿
二四三二	安永元	壬辰	一一	一六	安永ト改元
二四三三	二	癸巳			此年第四世晨園生ル
二四三四	三	甲午			
二四三五	四	乙未			
二四三六	五	丙申			
二四三七	六	丁酉			
二四三八	七	戊戌			
二四三九	八	己亥	一〇	二九	後桃園天皇崩御、聖寿二二
二四四〇	九	庚子			
二四四一	天明元	辛丑	四	二	天明ト改元
二四四二	二	壬寅			

二四六八	二四六七	二四六六	二四六五	二四六四	二四六三		二四六二		二四六一	二四六〇	二四五九		二四五八	二四五七	二四五六	二四五五	二四五四	二四五三	二四五二	二四五一	二四五〇	二四四九	二四四八	二四四七	二四四六	二四四五	二四四四	二四四三
五	四	三	二	文化元	三		二		享和元	一二	一一		一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	寛政元	八	七	六	五	四	三
戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥		壬戌		辛酉	庚申	己未		戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯
		七	二	二			二	二	正	四		七									正				九			
			二一	一一			一五	五		九		九									二五				八			
此年第五世万右衛門生。当春ヨリ 田中藩へ出入。越前守へ御用達金					文化ト改元（四代晨園三十一才）		松崎慊堂、掛川城主大隆公ニ召抱 ラル		遺家訓制定	十王源助祖歿ス		第三世萬右衛門歿ス、四九。第四 世晨園嗣ク									寛政ト改元			十代將軍家治薨ス、五〇				
		晨園記ヲ作ル						享和ト改元																				

二四六九	六	己巳	一〇	七	太田資順卒ス、四七。弟資言嗣ク
二四七〇	七	庚午	正	一八	田中藩ヨリ三人扶持下サル
			六	一七	太田資言卒ス、三二。養子資始嗣ク
二四七一	八	辛未			此年第六世万右衛門生ル
二四七二	九	壬申			寺ヶ谷墓地ニ山崎鼻祖ノ墓新脩。
					九月廿三日松崎慊堂、狩谷掖斎ヲ栗木谷ニ招ク
二四七三	一〇	癸酉	二	一一	高松城主松平讃岐守御泊リアリ
	一二				田中藩ヨリ二人扶持加増下サル。
					十一月太田藩御用達被命且苗字御免
					後桜町天皇崩御、聖寿七四
二四七四	一一	甲戌	一〇		久保栗谷ニ草舎ヲ造ル
二四七五	一二	乙亥	九		栗谷造草舎記成ル
			一二		松崎慊堂、掛川藩ヲ辞シ羽沢ニ移ル
二四七六	一三	丙子	五		掛川人口男二万九千三百八十口、女二万二千四百八十四口、寺社知行男三百七十八口、女二百二口ト云フ
二四七七	一四	丁丑	九	一	八兵衛ヨリ山田側地所ヲ購入ス
					第四世男才右衛門生ル。此年マス
二四七八	文政元	戊寅	四	二二	ラ池ヲ築ク
二四七九	二	己卯	九		文政ト改元
					秋、内藤備後守ヨリ集宝画御盃拝領
二四八〇	三	庚辰			太田侯ヨリ掛物二幅対ヲ賜ル
二四八一	四	辛巳	一一	二五	僧達道遷化、七〇

二四八二	五	壬午	三	八	本多豊前守ヨリ七人扶持下サル 第三世妻すみ没、六七。内藤侯ヨ リ第四世、拾人扶持下サル
二四八三	六	癸未	正	一五	本多侯ヨリ五人扶持下サル。第四 世晨園隠居。第五世万右衛門相統 晨園・土黙・持正等ト墨水ニ游ブ。 秋、内藤備後守ヨリ資治通鑑壱部 拝領
二四八四	七	甲申	六	二六	
二四八五	八	乙酉			牛頭ノ墓地ニ山崎鼻祖ノ墓新脩 久保コノメリ奥ニ隧道ヲ穿ツ。此 年山田側普請落成。
二四八六	九	丙戌			松崎慊堂、狩谷掖斎ヲ久保沢ニ招 ク。家中ノ面々御遊アリ
二四八七	一〇	丁亥			
二四八八	一一	戊子	一一	一	西尾侯ヨリ五世へ五人扶持下サル 正月山田側分家掟書ヲ定ム。七月 松平遠江守ヨリ三組木盃拝領
二四八九	一二	己丑			第四世晨園没ス、五六。太田侯ヨ リ五世万右衛門ニ御紋付御熨斗 目下賜。内藤侯ヨリ第五世へ拾人 扶持
二四九〇	天保元	庚寅	一二	一〇	天保ト改元
二四九一	二	辛卯			太田侯ヨリ御紋服頂戴。五月七日 太田資始京都所司代トナル
二四九二	三	壬辰	一〇	八	第五世万右衛門没、二五。弟万右 衛門相統ス（二二）
					西尾侯ヨリ第六世へ五人扶持下サ ル
二四九三	四	癸巳			西尾侯ヨリ第六世へ二人扶持加増

二四九四	五	甲午	四	一五	四男才右衛門山田側へ分家
二四九五	六	己未	五	一二	太田資始老中トナル
二四九六	七	丙申			太田侯ヨリ晒帷子拝領
二四九七	八	丁酉			此年飢饉
二四九八	九	戊戌			
二四九九	一〇	己亥	一一	一六	西町十王堺秋葉常夜燈建設
二五〇〇	一一	庚子	一一	一五	第七世徳次郎生
二五〇一	一二	辛丑	正	晦	光格天皇崩御、聖寿七〇
二五〇二	一三	壬寅	四	一	十一代將軍家斉薨ス、六九
二五〇三	一四	癸卯	六	一〇	太田資始隠居、資功嗣ク
二五〇四	弘化元	甲辰	四	二一	松崎慊堂、將軍ニ謁見ス
二五〇五	二	乙巳	一二	一	弘化ト改元ス
二五〇六	三	丙午	正	二六	仁孝天皇崩御、聖寿四十七
二五〇七	四	丁未	九		太池民家移住奨励
二五〇八	嘉永元	戊申	二	二八	家屋移転、敷地ノ目的ヲ以テ十王
二五〇九	二	己酉	一一		裏南西郷地ヲ求ム
二五一〇	三	庚戌	正		嘉永ト改元
二五一一	四	辛亥	四	一一	第六世妻せい入家
二五一二	五	壬子			町内へ施米ヲナス
二五一三	六	癸丑	七	二二	西町ヨリ十王裏へ家屋新築移転
二五一四	安政元	甲寅	一一	四	十二代將軍家慶薨ス、六一
			一一	二七	遠州大地震アリ
					安政ト改元

二五 二 乙卯 三 一七 第八世千三郎生ル。第四世晨園妻

九月十六日歿

大草主膳ヨリ米九俵扶持セラル

二五
一六
三
丙辰

二五二七
四丁巳
九八
井上侯ヨリ扶持米三人口下サル

二五二八 五 戊午 六 一二 洪水、之ヲ午年卜云フ。八月八日

十三代將軍家定薨ス。十二月廿六

日太田侯ヨリ御紋付御羽織及三

人扶持捍領。十二月第六世万右衛

門隱居。第七世徳次郎へ廿五人扶

持下サル

二五一九 六 己未 九 四

二五二〇 万延元 庚申 三一八 万延に改元。本多侯ヨリ第七代へ

三人扶持下サル。此年掛川全町各

戸ニ助力金ヲ支出ス

二五二一 文久元 辛酉 二一九

太田資功卒ス、資美襲封

二五二三 三 癸亥

二五二四	元治元	甲子	二	二〇	元治卜改元
------	-----	----	---	----	-------

二五二五 慶応元 乙丑 四 七 慶応卜改元

二五二六 二 丙寅 四月第七世徳次郎妻入家。六月南

西郷全村民ニ御救米ヲ出ス。八月

廿日十四代將軍家茂薨ス、二一。

十一月一日第六世万右衛門歿、五

六。十二月廿五日孝明天皇崩御、

聖壽三六

二五二七 三 丁卯

二五二八 明治元 戊辰 六月寛次郎生ル。 九月八日明治十

改元、爾后一世一元トナル。此年

洪水アリ。太田資美上総芝山へ移

封セラル				二五二九	二	己巳	四	一八	第七世徳次郎隠居、弟千三郎相統
				二五三〇	三	庚午	九	一九	平民ニ苗字差許サル。十二月廿四
				二五三一	四	辛未	正		日農工商ノ帯刀ヲ禁ス
				二五三二	五	壬申	八	九	平民ノ苗字差許サレタルニ依リ静岡藩庁ヨリ改メテ目録ヲ下サル
									庶人ノ散髪ヲ許ス
									荘屋名主年寄ノ名称ヲ廃シ戸長副戸長ヲ置ク
							一一		太陰暦ヲ廃シ太陽暦ヲ用ヒ十二月三日ヲ六年一月一日トス
				二五三三	六	癸酉	五	九	第七世徳次郎、学区取締仰付ラル
				二五三四	七	甲戌	五		南西郷ニ私立学校ヲ設置ス
				二五三五	八	乙亥	一二	一〇	第七世徳次郎、学区取締役免職願出■ヲ掛川南西郷両校世話係頭取被申付
				二五三六	九	丙子	九	二〇	徳次郎、掛川中学校保護係申付ラル
				二五三七	一〇	丁丑			
				二五三八	一一	戊寅	五		覚次郎、冀北学舎入塾
							一一	一	明治天皇行在所トナル
				二五三九	一二	己卯	三	三一	千三郎、南西郷・亀甲戸長申付ラル
									此年三月十二日大小区ノ制ヲ廃シ郡制定サル
				二五四〇	一三	庚辰			
				二五四一	一四	辛巳	八		八世千三郎妻入家
				二五四二	一五	壬午	一		覚次郎上京ス
				二五四三	一六	癸未	九	一六	九世淳一郎生ル

[illegible]

二五七九	二五八〇	二五八一	二五八二	二五八三	二五八四	二五八五	二五八六	二五八七	二五八八	二五八九	二五九〇	二五九一	二五九二	二五九三	二五九四	二五九五	二五九六	二五九七
八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	昭和元	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二
己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑
九	五	八			五		二	四		四	六			一一		一一		
二四		三〇			三一		二五	一一		一五	一		二					
地騷擾起ル	千三郎四男莊四郎歿、二六	西町徳雲寺墓地改脩	覚次郎、帝大経済学部長ニ補セラ ル。六月高等官一等ニ昇叙	十王百四郎没	覚次郎、旭日中綬章ヲ賜ハル。六 月勲三等ニ叙セラル	覚次郎、東宮職御用係仰付ラル	大正天皇崩御、聖寿四八。即日昭 和ト改元。一二月覚次郎、宮内省 御用係仰付ケラル	八世千三郎妻歿、六三	覚次郎正三位ニ叙セラル。七月七 日覚次郎帝大名誉教授ノ名称ヲ 授ケラル	覚次郎、中央大学経済学部長兼商 学部長トナル	聖蹟トシテ文部省ノ指定ヲ受ク	聖蹟指定標建設						

二五九八	一三	戊寅	一	一	覚次郎、日本学会第三常置委員
					会委員ヲ委嘱セラル
二五九九	一四	己卯	二	二八	覚次郎、中央大学理事ニ就任
			九	一	同人、日本銀行顧問ヲ委嘱セラル
二六〇〇	一五	庚辰			

跋

昭和十七年十月松ヶ丘山崎家より家譜調査を委嘱せられたりしも、不才其の任にあらざるを以て固辞志たり。然るに松ヶ丘家より番頭平松又作儀を遣わし再々懇囑せられたるに依り辞し難く、止むなく同年十二月着手し、翌十八年季冬に至るまで松ヶ丘家の奥間に席を設け、書庫に蔵する凡百の資料を調査し併て各地に散在する山崎家を訪問し、辛ふして本書を為す。調査完全ならず、排列当を得さるも、一時未定稿として一本を松ヶ丘に提出し、下書を家に蔵す。後日補正すへき所也。

昭和十九年八月

鷹邨袴田銀蔵

(了)

※『松ヶ丘山崎家略譜稿本』の翻刻はこれで終了です。同書はこのほかに「附録」があり、「静岡県下大井川疎水工事計画説明書」「掛川森間馬車鉄計画」などの資料を収載していますが、その多くが『掛川市史資料集』第二号（掛川市、一九七四年）の第四部「山崎ヶ蔵書外」に収められているため、今回の翻刻では省略します。

以善会